

JAF AE Newsletter

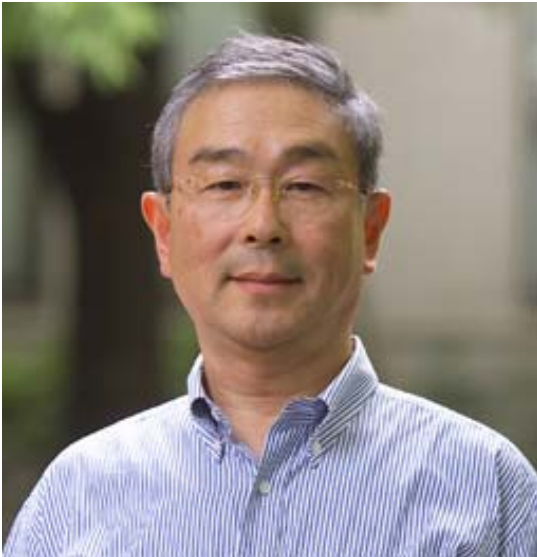


No. 20 (October 2006)

J A F A E は 創 立 1 0 周 年 を 迎 え ま す

巻 頭 言

English as a Multicultural Language and Intercultural Literacy*



Nobuyuki Honna
Aoyama Gakuin University

The world-wide spread of English has not ended up with the global acceptance of American English or British English. Rather the global spread of English has prompted the diversification of English. This phenomenon is quite natural because diffusion normally occurs as a concomitant result of adaptation and mutation.

One of the implications, or rather complications, of these multicultural enrichments continuously added to the English language is mutual communicability among world Englishes. This is an actual and

immediate problem. Cases of zero-/miscommunication in intervarietal interaction are abundant.

In fear of a new Babel, people often cry for a return to American English or British English as the standards. It is important to recognize here, however, that standardization or eventually re-standardization of the de-standardized standards is not a plausible way of dealing with the current multiculturalism and multiformalism of world Englishes. It was a measure meant to have prevented the diversification of English and has evidently failed to perform its function.

In *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order* (1996), Samuel Huntington claims that English as a lingua franca is “devoid of ethnicity, culture, or identity”(61). In the same vein, people tend to believe that a common language is a uniform language. But this is not true. English can be a common language on a multinational basis only when its cultural diversity is accepted. A common language has to be a multicultural language.

Obviously, restrictive and conformist approaches may be counter-productive in an endeavor to ensure the use of English across cultures while enjoying its multicultural values. Thus, if we are to establish English as a multicultural language and use it as an international language, we have to address the issue of diversity management.

I have tried to define these issues of diversity management in terms of pedagogical concepts of intercultural literacy, where I place teaching awareness of language as a fundamental component. This is based on the assumptions that part of language awareness is to improve sensitivity to, and tolerance of linguistic diversity by understanding how language is designed and how people use language.

While I consider awareness of language as an indispensable constituent of language teaching at all levels of formal education, teaching English as an international language (TEIL) should selectively incorporate some basic elements of cognitive linguistics and sociolinguistics (or pragmatics), aiming to overcome the major inconvenience (that is, intervarietal incommunicability) caused or to be caused by the spread of English as a multicultural language across the world.

One thing that I would like to see included in these programs is the study of metaphor (metonymy and synecdoche included here). In many countries, the fact remains that metaphor, although a cognitive and expressive device human beings are generally equipped with, is considered as a technical term limited for literary criticism, not as an operation ordinary people employ in all domains of their daily lives.

Metaphor has relevance to world Englishes to a great extent. If (1) below is a correct sentence, so is (2) and, of course, so is (3), all enjoying the equal correctness and legitimacy status.

- (1) *Zoya* is sharp.
- (2) The Arab *street* is angry, but the street is honest and sincere and we should listen to it. (*The Japan Time*, July 17, 2006: 5)
- (3) That *restaurant* is very delicious.

(Japanese English?)

Actually, if English is to spread further, there will have be many people in Japan who speak Japanese in English, many people in China who speak Chinese in English, and many people in Korea who speak Korean in English. We need to be ready to deal with the situation positively and creatively.

In my pilot survey, students were given a short lecture on the importance of metaphor in terms of intervarietal communication. Immediately after the lecture, they were given unfamiliar expressions from world Englishes and asked to interpret them. Those expressions contained such semantic extensions that contemporary Japanese does not share. And they obviously took advantage of the knowledge they acquired or reinforced before the exercise. Quite a few students were able to zero in on the targets.

Work on metaphorical competence by Azuma (2005:156) shows how Japanese students of English activate a Japanese schema in an attempt to decipher metaphorical expressions of English. Her findings imply that it will be productive to introduce the basics of metaphor into formal mother tongue education and reinforce them in TEIL from intercultural points of view. If it takes a long time to introduce language awareness to Japan's National Language syllabuses, then it is our urgent business to do so in TEIL.

Reference:

Azuma, M. 2005. *Metaphorical Competence in an EFL Context*. Tokyo: Toshindo Publishing.

(*This is an extremely short version of a paper presented at IAW E 2006 Nagoya.)

小学英語の必修化に思う

末延 孝生 (兵庫県立大学名誉教授)

はじめに

鳥は飛び、魚は泳ぐ。人はことばを話す。類人猿と決別した 400 万年も以前から、人間には言語が仕込まれてきた。この長い期間に、ことばを話すためのプログラムが組み込まれたのである。それは大脳を中心に神経経路を通じて骨格、血、筋肉の中に、身体の隅々まで広く行き渡っている。

それはちょうど「一寸法師」が物語の最後に手に入れたあの“打出の小槌”にたとえることができよう。この恩物は、訓練が必要だ。でも、簡単である。振れば振るほど宝物がいっぱい出てくるのと同じように、適切な言語活動を通じて、ことばも子供の口からほとばしるのである。それは本来、振る環境さえ整っていれば母語、外国語を問わない筈のものである。だから、人が母語だけでなくさまざまなことばを学ぶこと自体は、すばらしいことであり、すべての人間の権利でもある。

今、小学校に英語を導入すべきかどうかで論争がなされている。とはいえ、それは単に賛成か反対かというような二元論で解決できるものではない。

ことばを学ぶ環境

ことばは人間の権利だから学ぶことは当然と考えるのは早計である。何事も条件というものがある。それは学習環境である。日本では英語を学ぶほとんどの人たちが英語を嫌いになるといわれる。それはなぜか。

ことばは一つのシステムである。それはジャングルの蔦のように複雑に入り組んだシステムで、その骨格となるのが「文法」である。それはシステムの根幹を成す重要なものである。骨格は確かに大切な道具である。しかしそれは血も肉も神経もあってこそ、身体全体の栄養のバランスによってともに成長する筈のものである。

しかし人間とは浅はかなものである。中高大の現状はどうだろうか。せっかくの打ち

出の小槌を使うまでもなく、子供の柔軟な頭脳にこそそうした重要な文法規則を真っ先に叩き込んでおけば、自然とことばが身についてくるだろうと考える。文法というのは実体のない抽象的なもので、それ自体言語ではない。これを学ぶことは、ちょうど献立とレシピを見せるだけと同じで、実際に料理を味わう機会は与えられないのだ。ことばという料理を食べさせないまま、中高一貫してそんな授業を受けさせられてはたまったものではない。誰が一体興味を持つだろうか。頭の固いことばの学者や教師たちの多くは、ことばの本質とその学習に対してこれほどにも無知なのである。

子供には子供にふさわしい発音と文法がある。日本の子供だから余計に日本的な文法と発音があって当然である。そんな中で文部科学省ではいまだに「英語らしく」と英米文法と英語のネイティブ発音をあおる。それは裏返せば「日本人らしさを出さないように」ということを意味する。このような西洋崇拝主義、潔癖主義の下に、外国とは英米だけと信じている英語教師がいかにも多いことか。彼らは何の疑問をも抱かず、ただ一途に自分たちさえ到達できない英米英語を目指す。そして純粋な学習者を、二ホン英語はかっこ悪いなどと、自爆的、自辱的に自らをさげすむ国民にしてしまう。これは教師が指導の途上でじわじわと学習者に自国の英語を下げずませているのだ。彼らは“コーヒーを頼んだらコーラが出てきた”とか、多くの英米英語信奉者たちと同様に“発音で r と l を違えば絶対に通じない”とか、今まで必要以上に大げさに吹聴し、英語に対する恐怖感を煽ってきたのだ。このように学習者にとっては英語は手に負えない“いがぐり”であり、まるで綱渡りだ。

さて、中学生といえは個性の大切さを自ら実感し、それを発揮すべき時期である。人生の中でも最も重要なこの思春期の真っ只中であって、微に入り細に入る英米文法と発音を重視したこうした形式的かつ物まね的な英語学習は、彼らに対して何にも耐え難い屈辱

感を与えてきた。これは私自身の学生時代の実感でもある。教師の指摘を真に受けて、せっせと英米文法や発音を学ぶ優等生だけが良い成績をもらい、そうした彼らがやがて英語教師になって、こうした授業のあり方に何の疑問も持たないで教えるこの悪循環。(たとえば01年度の小中学生の不登校生徒数は13万9,000人となった。この10年で倍に増えたという。決して英語教育と無関係とはいえないだろう。)

こうして何千万という若者たちに無駄な努力をさせ、ほとんどが英語嫌いになって育ってゆく。それはちょうど言語活動を求める学習者たちが、英米文法の蔦に絡まれて身動きが取れないでいる状態とっていいだろう。そしてそこには文法規則という沢山の地雷が埋まっている。そしてこの21世紀になっても、このような英語教育の暗黒時代がいまだに続いている。しかし、英語という教科が、英米語のみを模範英語とし、必修且つ入学試験の最重要科目として君臨している限り、多くの英語学者や教師たちは安泰である。ところが、本当は学んでいる側はおろか、教えている側も精神が蝕まれているのだ。そして我が国ではいつの間にか英米英語を使うことが教養のシンボルとなり、社会的地位の獲得の道具としてしまった。でも人々はあまりそれに気がつかない。一種の病気とっていいかもしれない。英語教師たちは子供の大切な打ち出の小槌をうまく“振る”どころか、そのせっかくの道具を“叩き割った”上で、頭から英米文法と発音を叩きつけているとって過言ではない。

解決のための3つの糸口

こうした現状を解決するにはどうすればよいらうか。第一に、学習者の間違いを理解し、ほめる学習環境作りが必要である。学習者のちょっとした間違いに神経を尖らせる英語教師がいかに多いことか。自分は間違い探しが主要な仕事だと信じさせられてきたようである。たいていのことばの間違いは推理し、想像できるものである。学生が“I am 80

years old.”といっても18歳に決まっている。自転車で転ぶのと同じで、間違いながら学ぶのである。人は自分の間違いを自ら正す能力を持っている。それをいちいち指摘されると誰でもいやになる。逆にいじめの材料にもなり、ついには絶望に至る。要するに間違い訂正の多くは、話が途切れ、無駄な時間である。

それよりも本当に大事なことは、ほめることである。大学生の英語を40年も見てきて驚くことは、学生たちのほとんどが一度も自分の英語をほめられた経験がないということだ。そういえば私も一度もなかった。英米人と同じ英語でなければほめてくれないのだ。言語教育者がほめことばを知らないのだ。動物なら餌の報酬がいるが、人間はほめことばだけでいい。ほめることは母乳のようなもので、どれだけ栄養になることか。一方、けなす先生は生徒を餓死させてしまう。ことばの教師の一言は魔法である。学習者を一変させるほどに力を持っている。ちなみに私は大学の1レッスンでも100回以上はほめる。

第二に、ことばは、システム把握のための文法の勉強といった格式ばった教え方でなく、自然に楽しく遊んだり学習したあとの副産物として、ことばが獲得され保持されるのである。それはちょうど楽しく食べたあとの栄養としてのエネルギーと同じである。教師の文法説明を黙って聞いているのは語学学習ではない。それは単に忍耐力の学習でしかない。料理のレシピについては学んでも、実際にその料理を味わった学習者はほとんどいないのだ。

本来、ことばの学習というのは、楽しい、興味に満ちた言語活動をすることであり、ほんの一時間に数百から数千に至る生きた英文例が子供たちの感覚器官に刺激を与えるものであり、学習の終わりには頭がクラクラになり、顎がガタガタになるくらいに疲れるものである。私の学生たちは授業の後でいつも言っていたのを思い出す。「先生の授業は体育よりしんどい」と。大切な文法はそうした訓練があって後にこそ「なるほど、なるほど」と見直されるべきものなのである。それ

を私は「ああそうか文法」と呼んでいる。ひとつの文法規則の背後には数千、数万という文例の訓練が必須なのである。

第三に、「二ホン英語」の使用である。日本人の英語には、母語としての日本語文法や日本発音が干渉するのはごく自然なことで、世界中同じである。それに対して教育者たちが彼らに大人の英語や、英米の子供たちと同じ文法や発音を押しつけるのであれば、もうこれは拷問に等しい。

日本人の英語としての「二ホン英語」は、日本が誇る五十音図でもわかるように、子音と母音がしっかりと結び合わさっていて、一般に音節ごとに明瞭な発音がなされる。どの音節もしっかりと一つの母音を所有しているから当然明瞭度は高い。一方、ペラペラと格好がいいといわれる英米の英語は、[dfklt] (difficult, むずかしい) のように母音を省略することが多く、耳障りで擦れやすい。また、map, mat, mac などの単語は語尾の子音が聞こえないことが多い。しかし日本人の話す「二ホン英語」では、マップ、マット、マックのように語尾がむしろはっきりしていて全世界に通じる。

英米の英語を芭蕉の草書にたとえるなら、二ホン英語は小学生の楷書だといえる。芸術の世界では確かに格好がいいかもしれないが、誰も読めないでは困る。私の調査では、日本人大学生の二ホン英語の80%近くは通じるのだ。世界中で一番通じる英語のひとつなのだ。彼らこそ本当は眠れる獅子なのである。しかしその多くは通じないと諦めている。もったいない話である。その点で、日本人の英語は通じないと学習者に信じ込ませてきた英語学者や教師たちの罪は、実に大きなものがある。

これからの児童英語

子供に母語を教えるのに失敗した親はいないというのに、どうして英語教育は失敗に明け暮れているのだろうか。人もことばも本来はおおらかで寛容なものである。互いが仲良くするための道具だから、たいていは間違っても理解できるものである。それを、文法も

発音も英米式にという格式の中に当てはめていてはどうにもならない。

三十年近く前に私たちが児童英語教育の学会を発足するにあたって名づけた「児童英語」ということばの定義は、児童が大人と同じ英語を学ぶという意味ではなく、“児童が児童らしく、児童にふさわしい英語を教え・学ぶ”という意味であった。子供には子供用の自転車があるように、児童英語の目標は大人の英語ではなく、あくまでも児童の世界にふさわしい英語でなくてはいけないと私はすでに警告しておいた。そこには日本児童としての文法があり、また発音がある。だから、かれらの英語には、母語としての日本語文法や日本発音が干渉するのはごく自然なことである。それに対して教育者たちが彼らに大人の英語や、英米の子供たちと同じ文法や発音を押し着せるというのであれば、もうこれはいじめどころでは済まされない。

おわりに

何千万という英語学習者たちが今日も誤った目標と方法のために、無駄な努力に明け暮れている。一介の英語教師として申し訳ない次第である。私は小学英语の制度化に真っ向から反対するものではないが、文科省が、こんな現実を省みることなく、まだその上に小学生にまで制度化し、必修化までするとすれば、犠牲者が増えるのは火を見るより明らかであることは明言したい。これ以上の犠牲者を私は見ておれないからである。制度化する前に、即刻、現行の中高大学の学習者の立場に立った英語の実態調査を実施した上で現行の英語教育を即刻に改善すべきである。

そして、今こそ文科省は「英米英語を」とか「英語らしく」といった英米語崇拜主義を規制緩和し、日本人に最も適した「二ホン英語」を積極的に押し進めて行くべきである。当然のこととはいえ、いつの日か英語を教え学ぶ日本人の誰もが、堂々と「二ホン英語」を使う時代が来ることを念願する者である。それは英米語の強制により蝕まれてきた若者の精神を取り戻すための責任でもある。

W o r l d E n g l i s h e s :

Is it 'Politically Correct' (PC)?

James D'Angelo (Chukyo University)

With our faculty having just completed hosting the 12th IAWE (International Association for World Englishes) Conference at Chukyo University, from October 7th to 9th, the timing is perfect to write an essay for the newsletter. I gave a paper at the conference called 'World Englishes, Allan Bloom, and University Education,' and would like to outline some of the essential ideas.

Since we established the College of World Englishes in 2002, I have had a personal investment in seeing if the philosophy of world Englishes fits with my own thoughts on the role of English, and that the concepts of the discipline are considered by our part-time teachers. When we first opened the College, our part-time native-speaker language teachers (and non-natives as well!) responded a bit sarcastically: 'Does this mean *anything goes*, and we shouldn't correct our students' errors?' Or, 'I think world Englishes is just a passing fad!' Or simply, 'what exactly **is** world Englishes?'

Defining world Englishes, like any complex philosophy, is no simple task, and is often misunderstood, as seen by the above. Margie Berns, outgoing President of the IAWE, asked me at the end of my talk, 'Can you give a one sentence definition of WE?' I answered that it was recognition of certain varieties of English outside the native speaker varieties, and also an awareness of one's own variety of English as unique, but legitimate. She didn't seem satisfied! I would also say that world Englishes studies features of all varieties of English that are used *between* speakers from different

countries, but also *within* countries, such as when educated speakers of Singaporean English interact with less educated speakers of a basilectal variety closer to 'Singlish,' or when English is used as a *lingua franca* in India, or the Philippines. It is also the study of English in these and many more social contexts, and how individuals come to negotiate meaning, aware of how various speech acts and discourse patterns can differ among cultures. It recognizes that people use English as a medium to communicate to others important issues about their native country, not to talk about baseball. The definition could go on and on.

The point I really want to make, however, is that the vision of Braj Kachru is quite different from the interpretation expressed in one of the papers at the conference. The paper states, "it (WE) ...propagates a vision that its apologists aspire to realize, a vision of the linguistically democratic world where all varieties of English enjoy equal rights and treatment, regardless of their different phonetics, morphology, syntax, and pragmatics...." I think it is an error to equate WE with this type of PC overemphasis on equality, to the point where one cannot say one thing is better than another, or make any value judgments. Kachru himself was looking for respect for a sociolinguistic reality: that educated Indian English, among others, is an institutionalized variety that can claim to maintain its own endonormative standards, and which is colored by the flavor of local traditions and language. The Indian scholars even held a symposium in 2002, entitled 'The Empire *Speaks* Back!' This sounds more like Huntington's *The Clash of Civilizations*, than a dogma insisting on world peace and brotherly love! It is equality *across* elites, but not necessarily a vertical equality.

University of Chicago classics scholar Allan Bloom, in his 1987 best-seller, *The Closing of the American Mind*, outlines a world-view in which the practice of philosophy and the pursuit of truth is the best life. He laments the fact that the 'deconstruction' theory which resulted from the work of Derrida, Foucault and Lacan had created a situation where the 'great books' were no longer studied, and there was a tyranny of forced equality among academics, with new disciplines such as women's studies, black studies, peace studies, etc. replacing basic disciplines such as philosophy and political science. He believes that a general 'dumbing down' of universities has resulted from this, and from programs such as the MBA, which are not based on the search for fundamental truths.

In the scope of a newsletter essay we cannot properly address these complex issues, but I think it is important to be aware that both Kachru and Bloom, while having numerous differences, are nevertheless like Plato; he believed that ideal, higher 'forms' exist such as 'Beauty', or 'Honesty', but that they can never quite be known, grasped. But he did believe in their existence. I believe that Kachru is a true philosopher who seeks reality, and always has his paradigm open to question, not a PC pedagogue who forces his equality on us. Please spend the time to read them both closely, and *Bon Appetit!*

日中韓の英語使用：科研雑感

浅津 成一（鳥取大学）

平成 15 年から 3 年間、科研費で『日本・中国・韓国 3ヶ国間の「交流の場」における英語使用に関する実証的研究』というアンケート調査を行った。東アジアの「交流の場」における英語使用の実態を浮き彫りにしようという極めて「野心的」(ambitious) な試みである！しかし、この研究テーマにはアンケ

ート調査ではカバーしきれない要素も沢山あり、当初からその成果が懸念された。というのは、言語による「コミュニケーション」には、①一過性のものであって流動的で記録にとどめにくい、②調査対象・状況が多岐に渡り焦点が絞りにくい、③会話が複数言語による場合も多く主たる言語の特定が難しい、といった本質的問題点が常に伴っているからである。

そうしたリスクを覚悟の上で、状況を「国際学会」、対象を「大学の研究者」を中心に日本、中国、韓国の 3ヶ国でアンケート調査を実施した。韓国では筆者が長年の留学生受け入れて培った人脈を利用してソウル、大田、釜山の 3 都市で約 270 部のアンケート票を回収することができた。中国でも元留学生の力を借りて北京、大連、瀋陽を中心に約 220 部を回収することができた。この過程で、当初予想しなかったカルチャーショックもいくつか体験した。例えば中国では、一定数を越えるアンケートをする場合にはあらかじめ大学から許可をもらう必要があること。また、調査の協力に対して寸志を要求されるケースがあること、等々である。それはともかく、今回の調査では、鳥取大学で学んだ元留学生達が献身的に協力してくれた。人間関係の大切さをあらためて感じた次第である。

統計学的には厳密さを欠く調査となったが、そこから期せずして見えてきた興味深い事実もある。例えば、「母語話者、非母語話者と話す時の心理的状态」について、日本人の約 60%が「英語母語話者と話す時は常に不利に感じる」と答え、「時々感じる」と合わせると約 90%が「不利に感じる」と答えている。韓国人も同様に 89%に達したのに対して中国人は 67%で両者に比べるとかなり低い数値である。ここに中国人と日韓両国民とのメンタリティの違いをみる思いであった。

さらに、「自分の英語力」について、「会話力・読解力ともに自信がある」のは中国人が最高で 32%、ついで日本人 19%、韓国人 15%と続いている。近年の韓国における英語圏への留学ブームや早期英語教育の導入実績

から判断すると意外な結果である。逆に、経済的には発展途上で英語圏への留学率（人口比）も低い中国人の3割近くが自分の英語力に自信を持っているという。この「自信」の差は一体どこから来るのであろうか。「中華思想」を生み出した誇り高き民族の末裔中国人。その周辺属国「東方儀礼の国」として「礼節」（謙虚さ）を重んじた民族の末裔韓国人。自己の英語力に対する意識の違いに民族的 DNA の影響を感じるのは私だけであらうか。

新 刊 案 内



『英語力とは何か』

山田雄一郎著
大修館書店

ISBN: 4-469-24514-3
価格：1,680 円（税込）

紹介者：日野信行（大阪大学）

『日本の英語教育』（岩波新書）や『英語教育はなぜ間違えるのか』（ちくま新書）をはじめとする一連の著作で最近大きな注目を集めている山田雄一郎氏の最新刊であり、日本人の英語をテーマのひとつとする本学会の立場からも重要な意味を持つ著書である。

山田氏の長年の研究による学識の発露である本書の内容は多岐にわたるが、評者の理解する限りでは、本書の主要な狙いは、バイリンガリズムの理論でいう「共通基底能力」（あるいは「共通基底言語能力」）の概念を応用しながら、日本人の英語力の本質や英語学習のあり方について考察することにある。

確かに、従来、日本人のための英語教育を論じる場合、日本語力と英語力との関係について精密に分析されることは少なく、むしろ、単に両者がまったく別個のものであるかのように扱われることも多かった。山田氏は、日本人の英語力をバイリンガルの範疇でとらえ、日本語力と英語力の根幹部分における共通要素に着目する。言い換えれば、英語学習においては、この共通基底能力の活用が鍵となる

ということである。

山田氏のこの視点は、早期英語教育や小学校英語教育にまつわる諸問題や、あるいは語彙の習得、文法力や読解力の養成など、さまざまな側面に重要な示唆を与える考え方であり、今後の日本の英語教育の方向について検討する上できわめて意義深い。同氏のこれまでの著書と同様に、英語教育関係者や英語学習者に広く読まれることを願う。



『ポストコロナル文学の現在』

木村茂雄編
晃陽書房

ISBN 4-7710-1556-2
価格：2,730 円（税込）

紹介者：榎木蘭鉄也（秋田県立大学）

本書は大阪大学関係の研究者がポストコロナル地域の英文学をアカデミックに紹介している好著である。本書は 6 つの章の構成で、巻末には用語解説、各章冒頭には「水先案内」という各章の導入文が掲載されるなど、初学者にも読みやすいよう工夫がされている。

第 1 章から第 4 章は本書の総ページ数の 8 割を占め、第 1 章ではアフリカ、第 2 章ではインド、第 3 章ではカリブ、第 4 章ではカナダとオセアニアの英語文学の解説をしている。各章の各節では、その地域の代表的作家の代表作を要領よく紹介しており、事典的な内容となっている。インドを専門とする評者が特に注目したのは、インドの英文学を取り上げている第 2 章である。インド人（インド系を含む）作家による英文学は、インド国内では高等学校の英語教科書に掲載されたり、大学の英文科で必修科目になったりするほど認知度が高い。また、英語母語圏における評価が高いことも周知の事実である。しかし、日本では地道に翻訳や紹介がされてきたものの、一般の認知度は低いのが現状である。第 2 章ではインドの英文学を日本語でわかりやすく体系的に概説しており、関心を持つ読者に一

読を勧めたい。

第1章から第4章が作品解説の具体論であるのに対し、第5章と第6章ではポストコロンIALの理論が中心となる。第5章は本学会理事の日野信行氏による「ポストコロンIAL地域の英語」で、ポストコロンIAL地域の英語が Englishes や国際英語の視点から論じられている。第6章ではサイドなどの理論を取り上げながらポストコロンIAL理論が論じられている。とりわけ、第5章の「英語を媒体として非英米的な文化を表現することの大きな可能性を示してくれる点において、ポストコロンIAL英語の例が私たちにとても興味深い研究対象であることには変わりない。日本的な価値観を日本的な英語で表現できこそ、はじめて、日本人にとって英語の習得は本当に意義のある営みとなることであろう。ポストコロンIAL英語の使い手たちは私たちに、そのための貴重な参考例を呈示してくれている」(pp. 179-180)という日野氏による珠玉の一言は、本学会会員にとっておおいに示唆に富むと思われる。



『アジア世界の
ことばと文化』
砂岡和子・池田雅之編著
成文堂

ISBN: 4-7923-7074-4
価格: 2,940円 (税込)

紹介者: 河原俊昭 (京都光華女子大学)

この本は、早稲田大学国際言語文化研究所が「人間の生活の根底を成している言語と文化を切り口にして、新たな地域研究の方向性」を探るために刊行した「世界のことばと文化」シリーズの第1弾である。特徴としては、①それぞれの専門家が手堅く執筆しているので、安心して読むことができること、②各章がコンパクトにまとめられているので、読者が息切れしないで読むことができること、③出版が今年の3月であり、最新の内容が記述されていること、などが挙げられる。ある

程度はアジアを理解していると考えていた私だが、このような本を読むと知らなかったことをたくさん教えてもらえてありがたい。

この本は、全般に、文体がやさしくて読みやすくなっている。アジア全体の言語と文化を網羅しており、15章+αという構成であるので、大学の半期の講義(2単位)のテキストになることを意識して作成されたようである。

15章全部を紹介することはスペースの関係で無理なので、二つほど簡単に紹介したい。まず、第2章「韓国近現代史のなかのハングル」であるが、本学会の樋口謙一郎会員が執筆者であり、韓国民にとってのハングルの意義を膨大な歴史的な資料を基に説き明かしている。この章を読めば、ハングルが何故に韓国民のプライドの根源なのか理解できよう。

第15章「アジアの英語たちとその文化」は次期全国大会(清泉女子大)で基調講演される中野美知子先生が執筆されている。早稲田大学・遠隔教育センターは、海外協定校の協力により、日本英語、中国英語、韓国英語、台湾英語、香港英語、タイ英語、インド英語、マレー英語、フィリッピン英語、シンガポール英語に関するオン・デマンド・インターネットコースを作成したというが、本章はそのコースの紹介である。中野先生は基調講演でもこのコースを説明されるそうだが、非常に楽しみである。

全体を読み終えて、アジアという地域の文化的な広大さと底知れぬ深さを再確認した次第である。ヨーロッパは多様であると言っても、アジアと比べれば単一文化圏であると言っていいだろう。アジアの中心には、漢字に代表される中国文化がある。それに対して憧憬と反発を感じてきたベトナム、韓国、日本などの周辺諸国の文化がある。さらにはイスラム文化やインド文化がある。そしてアジア各地では、英語を媒介にして西洋文化の受容が進んでいる。このような各文化のダイナミックな相互作用をこの本は示しているのである。

事務局からのお知らせ

1) 次大会は12月2日(土)に清泉女子大学で開催されます。豪華メンバーによるパネルディスカッション、基調講演、特別講演など盛りだくさんの内容ですので、ぜひともご参加下さい。大会の詳細については同封の大会プログラム等をご参考下さい。

2) 本年度から研究助成プログラムの申込期間が12月1日~12月20日(12月20日消印有効)、選考結果通知は2月28日までとなりました。次大会の会員総会でもあらためてPRいたしますが、特に若手の方は積極的にお申し込み下さい。研究助成プログラムの詳細は、次のURLをご覧ください。

http://www.jafae.org/study_aid.html

3) 本年度から会員の皆様とのコミュニケーションを一層深めるためニュースレターの発行を年3回にいたします。エッセイの投稿やアジア英語情報の交換などに積極的にご活用下さい。

ESSC 実行委員会より

10月1日より、Extremely Short Story Competition (ESSC)の応募を受けつけています。ご指導なさっている生徒さん、学生さんがたの作品、そして先生方ご自身の作品をお待ちしています。詳しくは学会のホームページのトップページの「ESSCのご案内」をお読みください、同じく「ESSC 応募フォーム」のボタンから投稿してください。どうぞよろしくお願いいたします。

ニュースレター編集担当より

JAF AE のニュースレターは今年から年3回発行となりました。この10月の発行が増えたこととなります。次回の発行は1月下旬を予定しています。

会員の皆様からとくに次の2点についての記事を募集致します。

1) JAF AE 10年を振り返って

JAF AE は10歳になります。この10年間を振り返って、学会への思い、コメント、

期待などを熱く語っていただきたいと思います。

2) 紀行文・エッセイなど

国内外の紀行文、書籍紹介、海外おもしろ情報・画像、海外の新聞記事紹介など「アジア」「英語」「言語」周辺をキーワードとする読み物をお願いします。自分が知っているだけではもったいない、是非誰かと情報を共有したい、そんな情報をお持ちのあなた。どうかこの機会を通じてシェアして下さい。

いずれの場合も、800~1,200字程度で奮ってご投稿下さい。書いてみようというご意志がございましたら、11月下旬までに編集担当(相川, aikawa@nnc.or.jp)までお知らせください。

【編集後記】

京都はこれから一年で一番良い季節を迎えます。昨年は清水寺や高台寺に行ったので、今年は嵐山あたり紅葉狩りしたいと思っています。とは言いつつ、なんだかんだと締め切りに追われて、知らない間に年末になるんですね。名所に行けなくても、小さい秋をいっぱい見つけようと思います。

2006年10月20日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 本名信行

編集長 相川真佐夫

印刷 (有)すずき印刷

事務局

〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘1-25

白百合女子大学 田嶋宏子研究室内

FAX: 03-3326-4550 E-mail: tina2@gol.com

学会ホームページ: <http://www.jafae.org>

年会費振込先: 郵便振替 00280-8-3239

<< JAF AE Secretariat >>

Prof. Hiroko Tina Tajima

Department of English, Shirayuri College

1-25 Midorigaoka, Chofu-shi, Tokyo 182-8525

JAPAN

FAX: 03-3326-4550 E-mail: tina2@gol.com

JAF AE's homepage: <http://www.jafae.org>

JAF AE's postal transfer account number:

00280-8-3239